

イスラームとは何か？

本稿では、イスラームの基本的な考え方について確認していく。2022年10月に新型コロナウイルス感染症に関する水際対策が緩和され、また、2023年5月には、その感染症法上の位置づけが「5類」に移行したことで訪日外客数が回復してきており¹、総数に対する比率は小さいものの²、日本に来るイスラーム教徒（以下、ムスリム）の数も増加していると考えられる。また、訪日ムスリムに限らず、日本の人口減少を鑑みれば、これから在日ムスリムが増加する可能性もある。そのような状況の中、ムスリムに出会う機会も増えていくことが予想される。実際、千葉経済大学の最寄駅となる西千葉駅から徒歩1分のところには、礼拝堂（マスジド）を備えた千葉イスラーム文化センターがあり、千葉市に住むムスリムたちの拠点施設となっているため³、ムスリムと出会うこともあるかもしれない。今後、日本で多様な文化的背景を持つ人々と共生していくのであれば、イスラームについて知ることは、そのような社会を形成していく一助となるだろう。

ムスリムとは、「イスラームの教えに帰依した者」を意味する。ムスリムの人口は世界的に増加しており、2015年の時点では、17.5億人（世界人口の24.1%）であったムスリムの人口は、2060年には、29.9億人（31.1%）に達すると推測されている⁴。日本に住むムスリムについては、2018年6月時点で、約20万人（外国人ムスリム15万7千人+日本人ムスリム4万3千人）だと言われている⁵。

ムスリムには、「六信」を受け入れ、「五行」を守ることが求められる。六信とは、「アッラー（唯一無二の神）」「マラーイカ（天使たち）」「クトゥブ（啓典の諸書）」「ルスル（預言者たち）」「アーヒラ（来世）」「カダル（天命）」のことであり、ムスリムは、これらを信じなければならない。五行とは義務行為であり、ムスリムは、「シャハーダ（信仰告白）」「サラート（礼拝）」「サウム（断食）」「ザカート（喜捨）」「ハッジ（巡礼）」を行わなければならない⁶。

「シャリーア（聖法、水場への道）」は、ムスリムの宗教的および世俗的生活が具体的に規定されたものである⁷。シャリーアには、4つの法源がある。第1法源が預言者ムハンマドを通じて神の言葉をまとめた聖典「クルアーン」。第2法源が「スンナ」および「ハディース」。スンナは、預言者ムハンマドの範例・慣行を意味する抽象概念であり、実質的な内容はムハンマドの「言行

¹ 訪日外客数の合計は、2019年には31,882,049人であったが、2023年には25,066,350人にまで回復した。日本政府観光局（2024）「国籍/月別 訪日外客数（2003年～2024年）」。

² 訪日外客数から試算すると、2023年では、訪日外客全体に対する訪日ムスリムの比率は4.67%であった。訪日外客数は、日本政府観光局（2024）「国籍/月別 訪日外客数（2003年～2024年）」を参照。各国のムスリム比率は、Pew Research Centerの2020年のデータを参照した。Pew Research Center (December 21, 2022). Religious Composition by Country, 2010-2050. <https://www.pewresearch.org/religion/feature/religious-composition-by-country-2010-2050/>（2024年8月21日閲覧）

³ 千葉イスラーム文化センターホームページ, <http://www.cicc-japan.com>（2024年8月21日閲覧）

⁴ Pew Research Center (2017). *The changing global religious landscape*. Pew Research Center, p.10.

⁵ 店田廣文（2019）「世界と日本のムスリム人口 2018年」『人間科学研究』32(2)、255～260頁。

⁶ 黒田壽郎(1983)『イスラーム辞典』東京堂出版、45頁、137頁。

⁷ 黒田(1983)、173頁。

録」となるハディースに示されている。第3法源が、共同体の合意を意味する「イジュマー」。そして、第4法源が、類推を意味する「キヤース」である⁸。シャリーアでは、5つの行為が示されており、先述の「義務行為」に加え、「推奨される行為」「無記の行為」「忌避される行為」「禁じられた行為」がある。「禁じられた行為」は「ハラーム」と呼ばれ、反対に「許可された行為」は「ハラール」と呼ばれる⁹。

イスラームでは、ハラームに該当する行為や物が定められているため、ムスリムは、ハラームを避け、ハラールな行為や物を選択しなければならない。例えば、飲食品に関わる代表的な物としては、豚や酒が挙げられる。また、鶏や牛であったとしても、イスラームの方式で屠畜されていなければ、それらの食肉はハラームとなってしまう。しかし、現代社会においては、加工度の高い飲食品もあり、イスラームの教義から疑わしいと思われる事物（シュブハ）が増えている。それゆえ、原材料から製品の製造プロセスまでを通じて、製品がハラームな物に一切汚染されていないことを保証する「ハラール認証」の取り組みも行われている。企業がハラール認証を取得することで、ムスリムの消費者は、ハラール認証マークを確認し、安心して製品を消費することが可能となる。既述の千葉イスラーム文化センターがある建物の5階には、ハラール認証を発行する認証機関である日本アジアハラール協会も入っている¹⁰。

このようなハラール認証の動きは、これまでのイスラームの考え方の変容とも捉えられる。つまり、本来、ハラールとハラームの概念は、行為を対象とするものであるが、ハラール認証を活用したビジネスが注目を集めていることから、イスラームの戒律における物質的な側面が重視されつつあるということである¹¹。ただし、物質的な側面はイスラームの表層部分であり、イスラームとは如何なる宗教であるのか、その基本的な考え方を把握しておくことが重要となる。また、ムスリムを一括りにするのではなく、それぞれのムスリムの考え方は、出身の国や地域等の影響によって十人十色であり、本稿の内容を踏まえつつ、実際にムスリムと対話していくことが大切である。先述の通り、本学が位置する地域ではムスリムと出会える環境があるため、その地域性を活かし、ムスリムと対話することでイスラームへの理解を深めていくことができるだろう。

⁸ 日本イスラム協会・嶋田襄平・板垣雄三・佐藤次高(2002)『新イスラム辞典』平凡社、306頁。

⁹ 黒田壽郎(2004)『イスラームの構造』書肆心水、160～161頁。

¹⁰ 日本アジアハラール協会ホームページ, <https://web.nipponasia-halal.org> (2024年8月21日閲覧)

¹¹ 八木久美子(2013)「イスラーム的に消費するということーハラール概念の変容とその意味」『総合文化研究』16、38頁。